
書評

阿部圭一， 富永敦子著

『「伝わる日本語」 練習帳』

(近代科学社，2016年，A4判，151頁，1800円+税)

静岡大学大学院情報学領域 岡田 安 功

College of Informatics, Academic Institute, Shizuoka University Yasunori OKADA

著者の一人，阿部圭一氏は評者が所属する静岡大学情報学部の初代学部長である。阿部氏は情報学部が開講する日本語表現法の担当をすることはなかったが，学生の日本語教育に熱心であることは情報学部内でよく知られていた。富永敦子氏との共著であるにせよ，著者名に阿部氏の名前があるだけで，私は本書に期待を寄せてしまった。情報系の学問分野で論文を書くために必要な阿部氏の経験が本書に凝縮されていると，私は期待した。

この期待が高じて，私は書評を引き受けてしまったが，多少後悔している。本書があまり勧めない「が」をここまでに二回も使っている。いずれの「が」も逆説の意味なので著者の見解では許容範囲だが，「が」が逆説の意味かどうか曖昧な場合もあるので，「が」はあまり使わない方がよいと，本書は指摘している。実は「本書では指摘されている」と書いて「本書は指摘している」に修正した。この修正は本書の明らかな影響である。著者は「1つの文には1つのことを」と主張し，私も学生の論文指導では同じことをしばしば指摘するが，自分自身には必ずしも実行が伴わない。この現実私の思考回路の問題かもしれないが，時間に追われながら原稿を書いていると，推

敲が疎かになり，一つの文で複数の主張を述べることになる。多くの研究者は論文を執筆する経験から文章技術を身につけてゆくと思われるが，本書は文章技術をルール化しているので，研究者は本書を読むことによって経験で感じていることを言語化して強く自覚することが可能になる。読者はすでにお気付きだと思うが，評者は本書が教える文章技術を身につけて書評を書いているわけではない。本書をマスターして書評を書こうとすると，この書評の完成がいつになるのか見当がつかなくなる。著者にも読者にも申し訳ないが，未熟な文章技術で先に進ませていただく。

「が」といえば，評者の世代では清水幾太郎が書いた岩波新書の『論文の書き方』が有名である。評者が院生の頃，論文を書く人間は誰でもこの本を読んでいるという感じだった。今思えば，この本はどちらかといえば文章論だった。しかし，本書は実践的なトレーニングのための書物である。しかも，本書が展開する文章技術は，学生が大学で書くレポートや論文，学生が卒業後に書くビジネス文書の文章技術に限定されている。どの章にも文章に関する技術的な説明とともに，例題と演習が書かれている。しかも，演習はAとBに分か

れていて、Aには解答が付いているが、Bには解答が付いていない。したがって、本書は学生が演習Aを利用すれば独学が可能なので予習可能になり、教師は演習Aと演習Bを使って学生と対話をしながら授業を進めることができる。しかも、目次を見ると、章と節のタイトルが全て文章技術のルールになっている。目次自体が「伝わる日本語」になっているので、文章技術に心得があれば、目次を読むだけで著者の主張したいことが理解可能である。それぞれの章の最後には「まとめ」があり、読んだ章の内容を確認できるので、読者には章を二回読んだとほぼ同じ効果が生まれる。本書で授業を受けると、同じことを三回繰り返したことになるので、真面目な学生に本書の主張が定着する確率はかなり高い。学生が目次を見てこの「まとめ」まで連想できるようになれば、本書がかなり頭に入った証拠である。学生にはこれを目標として本書を読ませたい。おそらく、多くの研究者は各章の「まとめ」を読むだけで文章技術を整理できるだろう。しかも、本書を読み終わったと思ったら、「付録 チェックリスト」が各章の狙いと要点を簡条書きで示してくれる。結局、本書は要点だけでも三回繰り返している。これも本書の文章技術が読者に「伝わる」ための文章技術である。

我々は、論文を書く時、まず結論を考え、結論を論証するための議論の手順を考える。この手順が決まると、用語を選びながら句読点で区切られる文を作り、文を組み合わせで段落を作り、これが積み重なって章になり、章が組み合わされて論文が完成する。しかし、本書のトレーニングは、用語の選択から始まり、文、段落、章と、文の組み合わせの単位を徐々に大きくして、4章になってようやく文章全体の構成についてトレーニングが始まる。本書のトレーニングは次のように構成されている。「1章 適切な語を選ぼう」「2章 まぎれのない簡潔な文を書こう」「3章 パラグラフを組み立てよう」「4章 文章全体の構成を考えよう」「5章 文書への仕上げを考えよう」。このよ

うに、本書は文章の小さな単位を書けるようにしてから、4章で「全体像から細部へ」というルールが文章全体の構成にも各章にも各段落にも適用されることを説明し、5章で文章の仕上げ方を説明する。

感想を交えながら本書の内容を紹介してきたが、最後に本書の意義を考えてみたい。現在、我が国の大学はどこでも日本語教育の重要性が認識されているが、担当者が不足している。評者の勤務する情報学部の日本語表現法という必修の専門科目でも、担当者の確保がいつも課題になっている。多くの教員は自分の専門ではない科目を担当したくないという意識をもっている。この意識は当然といえば当然である。しかし、専門的な論文を書くための日本語が専門分野ごとにあるのではないだろうか。欲をいえば、阿部氏には社会情報学系の悪文を素材にして本書を書いてほしかった。当然ながら、専門科目ではなく、教養科目で日本語を書く能力を鍛えるという選択肢がある。本書はこちらの用途にも対応する。しかし、教養科目は1クラスの人数が多い。この種の科目は少人数で実施しないなら、文章技術に長けたTAを確保しない限り効果的な教育ができない。こんなTAを確保するのは至難である。このような現状に対して独学でも文章技術を習得できる本書の意義は大きい。ただ、学生が学部で書いた論文と修士課程で書いた論文を比べると、修士論文を添削するときの方が文章の乱れが少ない。この違いは考え抜いた深さの違いではないだろうか。本書のような立派な文章技術の本が読まれても、学生が旺盛な問題意識をもって深く考えるという訓練を受けなければ、学生の文章技術は向上しない。書きたいという問題意識のない学生は何も書けない。どの授業にもTAがついて、授業のたびにレポートの提出が必要になる大学教育が必要ではないだろうか。国はこのような教育を可能にするべきである。本書が提起する最大の課題はこの問題である。